

澤の屋は

下町・谷中の家族旅館奮闘記

外国人宿

澤
功

澤の屋は外国人宿

一九九二年五月二〇日初版第一刷発行 ©

著者……………澤 功

発行者……………平田純一

発行所……………**TOTO出版**

〒一〇五東京都港区虎ノ門一―一二八

電話〇三―三五九五―九六八九

印刷製本……………大日本印刷株式会社

1992 Printed in Japan

ISBN4-88706-055-6

* 落丁本・乱丁本はお取替します。

* 定価はカバーに表示してあります。

* 無断で本書の全体、または一部の複写・複製を禁じます。

澤の屋

下町・谷中の家族旅館舊圖記

江苏工业学院图书馆
藏书章

外国人宿

澤

功

OTO出版



7654

協定

Toast. ¥200-
Toast and fried eggs ¥300-
Milk. ¥100- Orange juice ¥100-
Japanese style breakfast
Tomato juice ¥100- ¥800-
Coffee and tea Free
Japanese breakfast.
(for example.)
1 ham. 2 steamed
3 boiled green veg.
4 boiled fish. 5 rice.
6 miso soup
7 Japanese pick.
Breakfast is served daily
7:30am~9:00am in the dining room.

If you want your room
cleaned, Please be out
by 11:00 Am.

当日
キャンセル料
午後5時までは半額
午後5時以降は全額

POST OFFICE
BANKS are closed
2nd Sat-
3rd

Kilamayo, Hap
... come from
... and Lady Graham.
... for all your kindness and
help. It was very kindly here



はじめに

澤の屋は小さな家族旅館です。その小さな旅館が有名になりました。

近年、新聞や雑誌、テレビなどに頻繁に取り上げられたからです。主人である私は、澤の屋を有名にしようなどとは思っていませんでした。もちろん、かつてはマスコミの世界とはまったく縁がありませんでした。

ところが、思いもよらないことにマスコミから注目されました。下町の日本旅館が「外人に占領」されたといつて話題になったのです。訳もわけらないまま取材に応じていたのですが、いつのまにか、澤の屋は下町の外国人宿として有名になっていたのです。

かつて澤の屋は修学旅行生や商用客で賑わっていました。それが、時代の流れとともに宿泊客がへっていきました。お客さんのいない旅館の寂しさはたとえようもないほどです。かといって、長年やってきた旅館の看板を下ろすことは忍びない。どうしようもなくなって、外国人のお客さんを迎える決心をしたのです。

外国人宿といっても特別なところはあまりありません。低料金で気持ちよく宿泊していただくことだけを心がけてきました。昔と変わらず当たり前の家族旅館なのです。

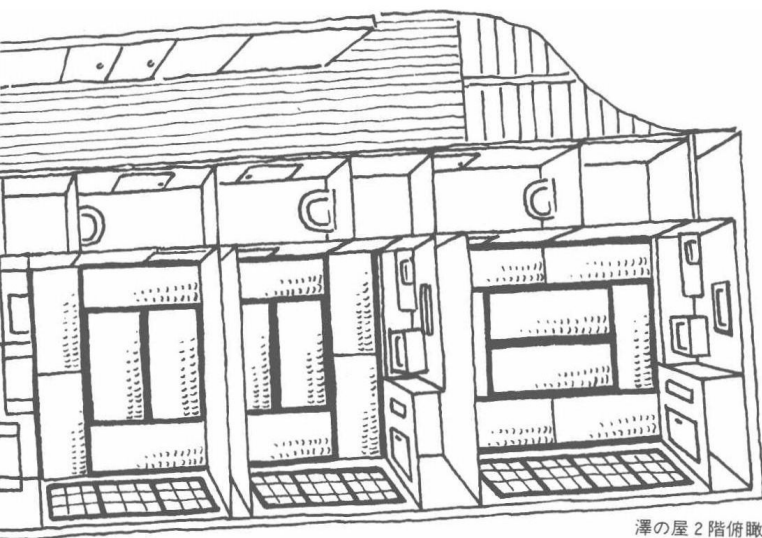
しかし、厄介なトラブルは数え切れず、この小さな旅館を舞台にいろんなドラマもありました。この一〇年間、外国人の宿泊者は年々増加し、昨年は延べ六千人を超えるほどにまでなつたのですから、いろんなことがあつても不思議ではありません。

それまで平凡だった私の人生も一変しました。世界各国の人々を迎えて、驚いたり、怒ったり、困ったり、考えさせられたりの日々となつたのです。以前なら、想像もつかないことばかりです。そんな外国人宿の日常を、旅館のオヤジが見たまま体験したまましゃべってみます。

それでは、東京の下町、谷中の小さな旅館、澤の屋にご案内します。

「いらっしやいませ！」

はじめに	4
1 澤の屋、外国人宿になる	9
初めての外国人客	10
外国人宿に変身	22
2 風呂とトイレが大問題	35
風呂場戦争	36
トイレの使い方教えます	47
3 知らないことばかり	59
アメリカの汽車は日本を走っていません	60
予約したお客がこない	68
英語を話さない外国人	80



澤の屋 2階俯瞰

4	あきれたり、感心したり……………	89
	料金のデイスカウントはできません……………	90
	真夜中の急患……………	100
	トラブルは尽きないが……………	110
5	外国人と付き合う法……………	131
	外国人になぜモテる？……………	132
	サービスしないことがサービス……………	144
6	下町の外国人……………	159
	澤の屋と下町……………	160
	下町の国際交流……………	175
7	国立劇場の舞台に立つ……………	185
8	澤の屋の歴史……………	199
	澤の屋の常用英語／34・88・158・184・227……………	228
	あとがき……………	228

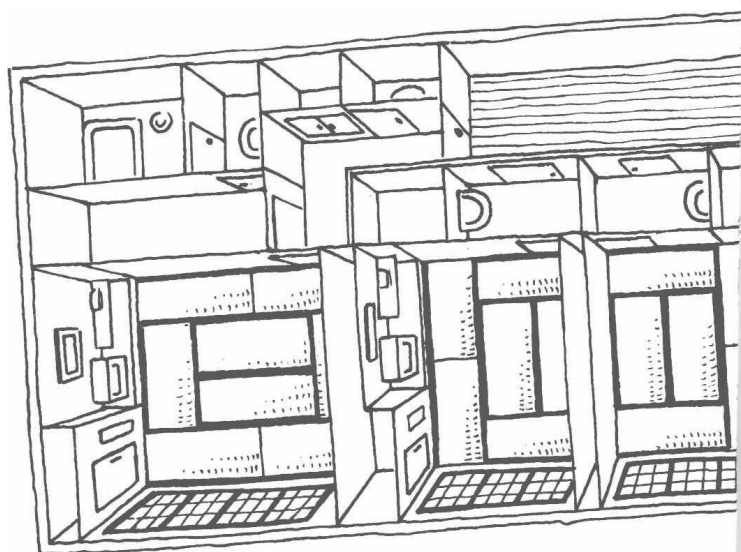


イラスト 大久保浩
装丁協力 緒方徹
編集協力 青絃社

●写真提供

夕刊フジ／見返し(表2)、213ページ、
139ページ下
毎日新聞社／43ページ上、79ページ、見
返し(表3)

読売新聞社／139ページ上、153ページ
日本経済新聞社／167ページ下

●資料提供

国際観光振興会
ジャパニーズ・イン・グループ

1 澤の屋、外国人宿になる



初めての外国人客

●決心

その日で三日目だった。澤の屋旅館にはついに三日間お客の姿がなかった。

さすがに私も、矢尽き刀折れたという思いで、ぼんやりと台所の椅子に腰掛けていた。昭和五七年七月のことだった。

「おかあさん、明日にでも矢島旅館さんに見学に行ってみようか」

「ええー、おとうさん、それ本気なの？」

驚きの声を上げた家内だが、内心では私の気持ちは十分すぎるほどわかっている。

矢島旅館ははやくから外国人のお客をとっていた。昭和五四年には、ジャパニーズ・イン・グループという外国人客を泊める家族旅館の組織をつくっていた。グループに参加している旅館は、当初は七旅館だったが、現在では全国で七七旅館にまで増えている。その矢島旅館のご

主人が、外国人をとるよう、かねてから私に勧めてくれていたのである。

善は急げだ。いや、もう後がなかった。翌日には、家内と私は大久保の矢島旅館に足を向けていた。

矢島旅館の玄関に立つ私たちを見るやいなや、矢島さんはこう言った。

「澤さん、今晚うちは満室だね。それでも泊めてくれというお客さんが三人、来ているんですよ。よかったら連れて行ってくれませんか」

矢島旅館にはお客が溢れていた。私たちがそれこそ、首を長くして待っているお客である。日ごろ見慣れない外国人が、そこでは当たり前のように何人もいた。

帰る道すがら、私たちは言葉少なかった。外国人に英語で応対している矢島さんの姿が目にとやきついている。

「外国人であろうと、お客さんにはかわりない。来ていただければそれでいいではないか」

私は自分でも信じられないほど明快に、そう納得していた。それまでは、外国人を受け入れるなんて、それこそ清水の舞台から飛び降りるようなことだ、と思っていた。それがいま、あっさりと飛び降りる決心をしている。

家内も同じ気持ちだった。帰り着くまでに、私たちは心を決めていた。

こうして、澤の屋は外国人を受け入れることとなった。

●金髪のお嬢さん？

その日、私と家内は朝からソワソワして落ち着かなかった。それもそのはず、なにしろ澤の屋が創業以来、初めて外国人客を迎える日であったのだから。

少々おおげさにいえば、その日のお客が澤の屋の死命を制することになる。そんな期待と不安のうちにお客を待っていた。

家内は、玄関先の棚やフロントなど同じ所を何度となく雑巾掛けしている。私はといえば、フロントのあたりを行ったり来たりして、時々玄関をうかがってみるのであった。なかなか現れる気配がない。来ればすぐわかるはずだ。なにしろ、金髪の若い女性がその初めての外国人客なのだから。

ちょうど一週間前のこと。外資系の会社から、カナダからのお客さんを一人預かってください、という電話があった。覚悟はしていたはずだが、いざとなると不安と心配がつる。

引き受けたからには後には引けない。けれども、私の英語、家内の英語、いずれをとってもおぼつかない。私と家内は、「困ったねえ、言葉が通じるかねえ」と互いに言い合うばかり。息子が使っていた英語の教科書を引っ張り出してきて、「ハウ・ドウ・ユウ・ドウ」「ホワット・ユア・ネーム」とやり始めた。不安をひきずったまま、あつという間に一週間は過ぎた。

「グッド・アフターヌーン」

軽やかな声が玄関先で響いたので、私は振り返って見た。そこには、かわいいお嬢さんが立っていた。英語であいさつしているけれど、現れたのは金髪娘ならぬ東洋人のお嬢さんだ。

「あれれっ？ たしかカナダからのお客さんのはず」と私は心の中で呟きつつ、少しどぎまぎしながらフロントに立った。

彼女は英語で、何やらベラベラとしゃべり出した。私にはもちろんチンプンカンプン。澤の屋に泊まるためにやって来たことを言っているようだ。「ホンコン」という単語が耳に入った。カナダ人には見えないが、ほかに外国人が来る予定はない。私は宿泊台帳を広げ、やっとのことで口から言葉を発した。

「ユア・ネームとアドレス・プリーズ」

そのお嬢さんは、スラスラと英語で自分の名前と住所を書いて、

「マイ・ネーム・イズ・ジェニー」

と言って微笑んだ。

私は宿帳に目を落として、たしかにCANADAとあるのを認めた。ようやく、私にものみこめた。そうか、カナダに住む香港人なのか。

ジェニーさんの荷物は、大きな旅行バッグをはじめ、持ちきれないほどだった。宿泊の依頼を受けたときの話では、日本にいる友人の伝で仕事を探すということで、澤の屋での宿泊は一

週間の予定だった。私はその荷物を受け取って、部屋に案内しようと先に立った。英語で何か言わねばと思うのだが、うまく言葉が口からすべり出してはくれない。ままよと、身振りでジェニーさんを促した。

玄関は少し段差があるが、靴を脱がずにそのまま上がれるようになっていた。まあ、ジェニーさんも何のためらいもなく当然のように上がってきた。初めて見る日本の旅館である。興味深げに周りを見ながら、私の後をついてくる。

「デイス・ルームです」

私が部屋のドアを開け案内すると、彼女はいきなり畳の間に上がろうとした。

「ノー、ノー、くつノー」

あわてて、彼女が上がるのを制止した。

はつきりわかってもらうには、なんて言えばいいのか。私は手にしていた荷物を置くと、踏み込みで自分の履いているサンダルを脱ぎ、畳の上にあがってみせた。

これでよかった。ジェニーさんは、ニッコリとして「オー・アイム・ソーリ」^{すいません}と言いながら、私を真似て靴を脱いでくれた。

とにかく、お客さんを部屋へお通しした。二階からの階段を下りながら、安堵の気持ちとまだ残る緊張をかかえて、「ガイジンさんを世話するのも大変だなあ」と一人ごちていた（本当の大変さは、まだまだわかるはずなかった）。

家内はフロントで心配そうに待っていた。上での様子を知らせながら、「言葉がなくてもわかつてもらえるよ」と自分に納得させるように言った。

しばらくして、様子をうかがいに彼女の部屋に行ってみると、スリッパを履いたまま畳の上にいるのを見る羽目になった。先が思いやられることである。

●お金がありません

ジェニーさんは、朝晩の二食を旅館で食べるようになっていた。彼女は朝食がすむとすぐに出かける。それはいいのだが、初めての東京の街は楽しいこと、面白いことが一杯あるのであろう。夜はなかなか帰ってこない。八時を過ぎて帰館した彼女に、私が「ディナー？」とたずねると、「ノーサンキュー」と答えて、ニツコリする。このことが二日、三日と続くので、私はたまらず、彼女が朝、出かける前にたずねることにした。

「トゥデイ・ディナー？」

日本人のお客ならば、指示があつたり、いろいろと問い合わせしてくれるのだが、ジェニーさんは、私と会話が成立しないとみたためか、そういったことはほとんどない。私の方は外国からのお客、しかも年若い娘さんをお泊めしているのだから、気になって仕方がない。何かこちらに問題があるのではと、不安にかられもした。